
花 ～大切な人～

りかこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花　　＼大切な人＼

【Nコード】

N 2 6 3 1 D

【作者名】

りかこ

【あらすじ】

中学生で一生懸命、恋をしました。大切な人のことを思いながら読んでもらえたら、嬉しいです。

第一章 出会い

「何度言われたら、分かるんですか!!」

「すみませんでした」

今日も…授業中うるさかった為に、職員室呼びだされた。

「今後、二度とこのような事がないように!!」

「…。」

「分かりましたか??」

「はい。」

―4月

私立の中高一貫校に通っているどこにでも居る、普通の中学生。
毎日のように、怒られている、私の名前は…利佳子。

今年…晴れて、中学2年生になることが出来た。

クラスメートも、先生も変わって、また新しい一年が始まるう
としている。

クラス替えて絶対離れると思ってた、友達とも、また同じクラスに
なれた。

なんだかんだ、毎日：みんなで笑って、時には先生に怒こられて、とっても楽しい毎日だった。

月日も変わって、文化祭シーズンが来た。

彼氏は「居ればいいなー」とは思うけど、絶対欲しいとは思ってなかったし、今はみんなと遊ぶほうが大事：と思っていた。

そんなある日、小学校時代の友達から、電話が来た。
裕美だ。

「元氣?？」

相変わらず、とっても、テンションが高い。裕美は、耳にピアスをして、髪の毛が茶色で、いわゆるギャル。

「うん、元氣だよ」

「あのね、文化祭のお誘い何だけど、明日〇×学校の文化祭行かない?？」

〇×学校は、利佳子の近所の学校で、不良のイメージしかない学校。でも、何も用事なかったし、初めての文化祭だし、行こうとかなあと思った。

「いいよ」

「本当に→→良かった。うち、彼氏と別れちゃってさあー」

「まぢで!!!」

「だから、ここの文化祭で彼氏を作るのー→」

「OK!!」

「じゃあ、明日…いつもの場所に10時ね。」

「了解。じゃあね」

「うん。」

「ばいばーい」

次の日、10時に待ち合わせ場所に行くときまだ、裕美は来てなかった、15分くらいして、裕美が来た。髪の毛は金色で化粧はいつもの2倍ぐらい濃く、ピアスはいつもより大きいものを付けていた。

「ゴメンー。化粧に時間掛っちゃった。」

「全然いいよ。てか、朝ご飯食べたー?」

「食べてない。」

「じゃあ、食べてから行こう。」

「良いよ!!」

朝ご飯も食べて、いよいよ、○×学校に行く!!
来ている女子中高生は、ほとんど、ギャル。自分とっても浮いて

いた。

入る前に、裕美はもう一度鏡を確認して、髪の毛をいじっている。

「どこのクラス行く??」

「んー。ここが良い!!」

パンフを見ながら、裕美が指した教室は、高校3年生の

「出会いの場」

と書かれた、教室だ。

何か、とっても怪しい教室だった。けれど、お構いなしに裕美は、その教室に入って行った。

入った瞬間、ウチらの方に、誰か来る。一人は、髪の毛は金色で鼻にピアスをしている。もう一人は髪の毛は黒でブラウスが第三ぐらいまで開いている。どちらもとっても怖そうだ。

「可愛いね。俺らと遊ばない??」

「うん。遊びたーい」

「えっ!!」

思わず言ってしまった。

「嫌なのー??」

「別に…」

「じゃあ、決まり」

仕方なく、裕美の後ろを着いて行く。椅子に座り、自己紹介をした。

「俺は、神山 慎吾よろしく!!」

髪の毛が黒い方。第一印象はとってもテンションが高い。

「桐山 健よろしく。」

髪の毛が金色の方。第一印象は、無愛想。

「松本 裕美です。ちなみに、今、彼氏募集中です。」

「戸山 利佳子です。よろしく!!」

最後に、噛みながらも、自己紹介をした。

そして、一時間ぐらいして、利佳子を除いてみんなとっても、盛りがっていた。

裕美に耳打ちをして、何とか、教室から抜け出した。

廊下にあった椅子に座っていると、前から、誰かが来た、髪の毛が金色…さっきの人だ。

確か名前は…健。

「こんなところで何やってんの??向こうでみんな、盛り上がってるよ!!」

「何か、メールが来てたみたいで…。」

とつさに、嘘をついた。

これが健と初めて喋った言葉だ。

この時は、まだ、これから起こることなど想像もしていなかった。

「何か、あっちの二人も盛り上がってるみたいだし、俺らは、どこが違う所行かない―??」

このまま、一人で居るのもつまらなかった…。

「いいよ」

「どこか行きたい所ある??」

「特にない…。」

「じゃあ、屋上でも行くか??」

何の為に屋上に行くのか分からないけど、取りあえず、怖かったから、「うん」と答えた。

「利佳子は彼氏居んの??」

「居ないよ」

こんな会話をしながら、屋上に着いた。屋上には5・6組カップルが居た。こんな所に居るなら、今すぐ、裕美の所に行きたかった。

「あの辺に座るか??」

「うん」

椅子に座り、沈黙が続いた。

その瞬間、健は、利佳子の頭を引き寄せて利佳子の唇と、自分の唇が重なる。

あまりに強引で身動きが取れない、健の舌が利佳子の舌と絡み合う、健は、利佳子の体をゆっくり、椅子の上に倒す。ヤバいと思いい、何とか…健を離した。

「何すんのよ!!!」

その場から飛び出した。

健は後を追っては来なかった。

さっきの教室に戻ると慎吾と裕美が居ない、当たりを見回すと廊下の端の方で、慎吾と裕美が抱きあっていた。そのまま、見ない振りをして、家に先に戻った。

帰る途中、携帯がないことに気がついた…。

いつ落としたんだろう??

健と屋上に行く時はあった。

きっと、走ってる時に落ちたんだ。

仕方なく、屋上まで戻ることにした。

階段を上がっていると、前に、健が居る。

ふっと見ると、健は利佳子の携帯を持っている。

今は、健とは喋りたくなかったけど、携帯なきゃ困るし、気づいたら足が動いていた。

「あのー携帯。」

「さっきはゴメンな。いきなり…。」

謝られる何て、思ってもなかった。

「いえ、別に…」

「はい。携帯!!」

「ありがとうございました。」

キスされたのは、びっくりしたけど、健が携帯を拾ってくれなかったら、今頃、携帯は見つかっていなかったかもしれない。

「あのー。」

「何や??」

「ありがとうございました…。」

「良いから!! まちでゴメンな!!」

「いえ…もう良いです」

気がつけば、お昼過ぎだ。

「お腹空いたな―??」

「利佳子もお腹すいた!!」

「じゃあ、たこ焼きでも食べるか??」

目の前でたこ焼きを売っていた。

「うん。食べる→」

「いくら? 300円くらいで足りるかな?」

「奢るから!!」

「良いの——!! ありがとう。」

利佳子はいつだって、健のそういう、さり気ない優しさが嬉しいかったよ。大好きだったよ。

椅子に座って、2人でたこ焼きを食べる。

「お前、口にソースついてるぞ」

「えっ!! どこ?」

「動くなよ!!」

健の手で、利佳子の口についていた、ソースをとってくれた。

「ありがとう」

顔を真っ赤にしながら言った。そんなことしてると、裕美と黒髪の慎吾がこっちに来る。2人は手をつないでとても、ラブラブだ。

その姿を見て、健は：

「俺らもラブラブな感じ見せようぜ」

そう言って、利佳子の手をとった。これが、初めて手をつないだ時だったね。

「りかこー!!」

裕美が走って来る。

「あれ、2人ラブラブですねー」

「まあな!!」

「ウチも慎吾とラブラブなのー!!」

とっても嬉しいそうだった、それに、裕美は、彼氏を探しに来たわけだし、良かった。

「じゃあ、あたしたちトイレに行って来ます、なので、ちょっとの間りかこを借りますー」

言わなくても良いことを…。と、思いながらも、トイレに行った。

「で、健さんとは…どうなったー?」

「どうなったって、言われても…」

今思えば、健と慎吾も、ウチらが居なくなった瞬間に、こういう話

をしていたのかなあ??と思う。

「ウチは、慎吾と付き合うことにした!!」

「まぢで!!」

普通だったら、1日で付き合うなんて、有り得ないけど、さらだから、あまり驚かなかった。

「おめでとう」

「ありがとう」

「りかこも健さんと頑張ってね」

「うん」

裕美には、キスされて逃げだして、携帯落として、戻って来たことは言えなかった。

「じゃあ、二人とこ戻ろう!!」

「うん」

戻って、また、4人でいろんな話をした。何となく時間も過ぎて、文化祭の終わりの時間が来た。

「これから、カラオケ行かない??」

裕美が提案した。

「賛成」

もちろん、慎吾は賛成した。

「俺も、賛成!!! りかこは??」

「ゴメン←←塾!!!」

「じゃあ、俺送るわ」

「えっ!!! 良いよ。近いし気にしないで、カラオケ行って来てー」

「女を1人で帰す奴は居ないから」

「ありがとう」

そうやって、いつも利佳子は健の優しさに惹かれていったんだね。それまで、黙っていた、慎吾と裕美が冷やかした。

「メツチャお似合いやでー」

「りかこ良かったね」

「別に付き合ってるわけじゃないしー」

「じゃあ、俺らはカラオケ行くかー??」

「行く→→」

「じゃあねー」

「うん。バイバーイ」

テンションが高い2人が居なくなり、何か…ほっとした。

「じゃあ、俺らも行くか」

「うん」

と、言って…着いた場所は自転車の置き場。

「俺…自転車だから、後ろ乗れるか??」

「うん。多分…」

もちろん、男の人と、2人乗りするのは、初めての体験。緊張しながらも後ろに乗る。

「ちゃんと、掴まれよ」

軽く、背中に掴まった。

「飛ばすから、もっと、ちゃんと、握ってなきゃ、落ちるぞ」

と言って、りかこの手を掴み、自分のお腹の方に回す。

「家どっちの方??」

「んー踏み切りの方」

とっても、短い距離なのに、とっても、長く感じた。

「ココかあ?？」

「うん。今日は、ありがとうね。」

「電話してもいいか?？」

「いいよ」

電話番号とメールアドレスを交換した。

「じゃあ!!」

「バイバーイ」

あの時：健に出会っていなければ、携帯を落としていなければ、こんな苦しい思いをしなくて良かったのかもしれない。

こんな、恋を知らずに済んだのかもしれない。

第二章 素直

「もしもーし。俺…健だけど…」

「もしもし。分かるよ!!」

「塾終わったか??」

「うん。終わった」

「今、空見てみ??」

「えっ!! うん。」

ドアを開けて、空を見る…。

満月だ。

「綺麗だねえ」

「だろ!!」

傍に居なくても、今、

同じ満月を見て居るんだね。

「あのさあー今度、俺の友達紹介するから、たまり場来ないかあー??」

「行って良いの??」

「りかこが良ければ、いつでも…」

「行きたーい」

「ちょうど、明日は土曜日だし、明日わー?？」

「りかこは、午前授業がある←←」

「健は?？」

「俺は、文化祭の片づけあるらしいけど、休むつもり!!」

「そっかぁー」

「でも…りかこが学校なら、学校終わってからでいいからー」

「じゃあ、学校終わったら、電話するね」

「おう!!じゃあな」

「バイバーイ」

何か、分かんないけど、とっても、緊張した…。

てか、今度会う…しかも…明日…電話を切ってから、状況がやっと分かった。あ〜どうしよう。

そんな時、着メロが流れた。

誰だろう??

…裕美だ。

「もしもし」

「はいはい」

「健さんとは、ラブラブですか?」

「いきなり何言ってるの!! そういう関係じゃないし!! そっこそ、どうなの??」

「聞きたい!」

いかにも、聞いて欲しそうな、言い方だ。

「あのねえーあの後、カラオケ行って」

キスして、ちょっとだけ、Hしちゃったー!!」

「まぢで!!」

「うん。まぢ!!」

本当に、裕美はやるのが早い。

「あっ!! ゴメン!! 裏に電話入っちゃた←←」

「慎吾さんからじゃない?」

「そうかも→→」

「じゃあねー」

「うん。バイバイ」

電話を切った瞬間、明日の焦りが込み上げてきた。

H：キス…まさか、有り得ない。

そんなことを考えていたら、夜も寝れずに、朝が来た。

学校では、1・2・3限が終わり、終礼が終わった。

トイレに駆け込み、電話をかける。

「もしもし」

先生に見つからないように、小声で喋る。

「もしもし。学校終わったか??」

「うん。終わった」

「渋谷まで、出て来れるか??」

「うん。4駅ぐらいで着くよ」

「じゃあ、13時に渋谷のハチ公前な」

「はいはい」

電話では、顔が見えないからか、
とっても素直に喋ることが出来る…。

でも、実際、会うとなると話は別だ。
心臓の鼓動が半端なくヤバイ。

待ち合わせの15分前に到着。

健は居ない。

3分ぐらいして、健が走って来るのが、分かった。

「ゴメンな―」

「全然大丈夫!!」

「お昼食べたかぁ―??」

「まだ←←お腹すいた」

「何食べるか??」

「んーパンとか」

「じゃあ、美味しいところ連れてたるわ」

「うん!!」

健が連れてきてくれたのは、駅から、
2・3分の所で焼きたてパンのお店だった。

「意外とこういうお店知ってるんだね―」

「意外とって…何や」

「だって、意外だもん!!もしかして、たくさん女の子が居て来たとか?」

「そんな分けないだろ!!俺…パンとか好きだし」

「ふーん」

「何怒ってんの—??」

「別に…。」

何か、いろいろ話したら、お昼も食べ終わっちゃって、たまり場に行くことに…。

「着いた!!ここやで!!」

「普通のマンションじゃん!!」

「そうだよ!!どんなんだと、思ってたの??」

「ん—公園とか??」

「はっ!!公園!!バカじゃん」

何か、健と喋っていると、初め自分が…あんなに緊張しているのがバカみたいに思えてきた。

ピンポーン

「はいはい、今開けるで…」

ドアの向こうから、誰かが喋っている。

「誰や?? あっ!! 健先輩!!」

寝起きの顔で、ドア越しから出て来た。

「あれ?? 誰ですか?? 健先輩の彼女ですか??」

「違います…」

「俺の彼女のりかこやで!!」

否定する前に、健が答えてしまった。

「こんにちは。俺は祐よろしくな。」

「りかこです。よろしくお願いします」

軽く自己紹介を済ませ、部屋に上がると、
一目見て7・8人の男子は居た。

開いた口が塞がらない。

「あっ!! 健先輩」

「よっ!!」

「久しぶりで〜す」

「久しぶりー」

みんな、健に声をかける。

「みんなに紹介するな！！俺の彼女…りかこやで」

「戸山 利佳子です、よろしくお願いします」

「よろしくな」

「まっ！！自己紹介もすんだ所で、俺ちよっと、飲み物買ってくるな、りかこはここに居るか??」

「えっ！！うん。」

「じゃあ、行って来るな」

「先輩…俺も行きます」

さっきの祐だ。

「あっ！！お前ら、りかこに手出すなよ」

健と祐が飲み物を買って行ってしまった。

りかこは待ってるって、言っただけ、どうしようー???

まだ、誰とも喋ったことないし！！

「俺！海斗：健とは文化祭で知り合ったの？？」

「はい、そうです。あっ！！あのー何でさっきから、みんな、健のこと、健先輩って、言ってるんですか？？」

「あー俺ら、みんな学校が同じなだけで、学年は違うから」

「そうなんですかー」

「後、ここに居る時は敬語使わんでいいから」

「あっ！！はい。じゃなくて…うん。分かった」

「あっ！！帰って来た」

「よっしゃ！！みんな、飲むか」

「えっ！！お酒？？」

お酒何て、飲んだことないし。

「あっ！！お子ちゃまには、ジュース買って来たで」

「お子ちゃまって何よ！！」

「よっしゃ、みんな、乾杯」

「「乾杯」」

りかこ以外誰も、ジュースを飲んでる人は居なかった。

自分だけ、ジュースを飲んでいることが恥ずかしかった。

「健りかこもお酒飲む!!」

「えっ!! 止めとけて」

「大丈夫だから」

「じゃあ、半分な」

健が飲んでた、お酒をくれた。

初めてのくせに、強がって、ごくごく飲んだ。

1分くらいで、健からもらった缶は全部無くなった。

「もう、一杯」

「大丈夫か?? 飲みすぎやって!!」

「平気だから、もう、一杯ちょうだい!!」

二杯目も飲み終わり、頭の中がふわふわする感じがした…。

ヤバイ、酔った。

トイレに行こうと思って、歩いたがふらふらして歩けない。

「だから、飲みすぎるなって、言ったら!! ゴメン、優雅…お水持
って来て!!」

「だって、りかこもお酒飲みたかったの——!!」

「健!! お水持って来たで」

「ありがとうな」

「飲めるか??」

「うん。」

お水を飲んでからの後は、全然覚えていない、
気づいたら、りかこは寝てしまった。

起きた時は、夜の8時だった。

「け…ん…健??」

「あっ!! 起きたか??」

起きて、びっくり!! 健がりかこの隣で一緒に寝ていた。

「健ゴメン←←寝ちゃた。」

「これからは、ジュースにしとけよ!!」

「うん、分かった、ゴメンなさい」

あゝ頭痛い。気持ち悪い。
でも、明日は学校がない、良かった…。

「外の空気でも吸いに行くか??」

「てか、もう帰らなきゃ…←←」

「あっ!!もう、そんな時間かあ!!」

「じゃあ、俺らは帰るな!!」

「おう、またなあ」

「お邪魔しましたー」

「いつでも、来て良いから!!」

「ありがとうございますー」

初めて…たまり場来て、酔って寝ちゃって、ウチの第一印象…最悪だし←←とか、思いながら、歩いていると、健が真剣な顔で話しかけてきた。

「りかこ…お前のこと彼女とか、言ってゴメンな」

「いいよ」

「お前の気持ちまだ聞いてなかったし…」

「ウチは健のこと、す…き…好きだよ」

今の素直な気持ちを言った。

健の第一印象は、正直…無愛想で怖い人だなあと思ってた。でも、最初の気持ちと、今健に対する気持ちは、正反対だ。

「りかこ…上向いて!!」

健の冷たい手がりかこの肌に触れる。

健の手がりかこの頭を引き寄せる。首に手を回した。

りかこの唇と健の唇が重なり、何回も何回もキスをした。

まるで、あの日、文化祭でしたキスを忘れるかのような…。

優しいキスだった。

「可愛いなあ」

「えっ!!」

「いや…別に。これ以上は手出さないから。心配すんな、お前が俺のこと信じられるまで、待つから…。」

「ゴメンね」

「お前が誤ることないから…。」

「でも…」

りかこが言い終える前に、健はまた、唇を重ねた。この日も、健に送ってもらって、家に帰った。

この日から…。

健はりかこの彼氏。

りかこは健の彼女になった。

第三章 証

会える時は、毎日のように会って：どこにでも、ある普通の恋愛をしてた。

それだけで、今はとっても、幸せだった。

この幸せがいつまでも続きますように。

「ゴメンー遅れた。」

「15分遅刻だぞ!!」

「ゴメン←←」

お詫びの印にりかこから、健にキスをした。

「許してくれた―?？」

「仕方ないなあ―」

今日は、日曜日：朝から、健とデート!!
でも、行く場所は健しか知らない。

「健どこ行くの??」

「内緒!!」

「じゃあ、何をする所??」

「んー内緒!!」

「もう良いもん!!」

新幹線に乗って、りかこが寝ている間に着いた場所は、

湘南の海

「わぁー海だー」

「気持ちいいなあ」

「うん。でも、11月だから…まだ、水冷たい。」

「当たり前や!! 来たくなかったかぁー??」

「ここには、利佳子と健しか…居ないんだよ。」

利佳子とっても、嬉しい!!」

砂浜に座っている健の隣に座った。

健が砂浜寝っころがった…。

健の腕に頭をのせて、二人で空を見上げる。

「空きれい」

「だな!!」

「喧嘩しても、2人でここに来て、仲直りしようね」

「おう！！約束な」

「うん。約束」

「あっ！！そうだ！！手出して」

「はい」

「目閉じて、絶対開けんなよ」

「うん。分かった」

ゆっくり目を閉じた。

健が手の上に、何かを置いた。

「目開けてもいいー??」

「ええよ！！コレなープレゼントや！！」

「えっ！！プレゼント??」

手のあったのは…指輪だった。

「俺の彼女の印や」

泣きそうになった。悲しいからじゃない…。

とっても、とっても、嬉しかったから…。

「泣いてんのか?？」

「泣いてないし!!」

「嘘や!!」

「だって…。け…んが…指輪…な…んて…くれる…と思わ…なかつたもん…」

健の優しさに泣いてしまった。

「健…ありがとう…ね」

「おう!!」

「じゃあ、そろそろ帰るか!!」

「また2人で来ようね!!」

「約束な」

「うん!!」

手をつないで、駅に向かった…。

電車に揺られながら、今日のことそして、健のことを考えていた。りかこの右手には、たった今もらった指輪が光っている。

健が大好き。

こんなにも、誰かの事を好きになったのは…初めて。

初恋。

渋谷駅に着いたのは6時ぐらいだった。

「俺は今から…たまり場行くけど、一緒に行くか?？」

今日は塾もないし、適当に理由を付ければ、親もごまかせる。

「行く→→」

たまり場に行くのは、これで、三回目だ。

ピンポン

「はいよー今、開ける!!」

いつもの祐の声だ。

「りかこと祐でゝす」

「よっ!!」

「見てみてー!!」

手を広げて、自慢げに指輪を見せた。

「健からもらったの―→」

「良かったなあ―」

祐がうやらしそうに言った。

「こんばんは」

中に入って、みんなに挨拶をする。初めは喋れなかったけど、今はとっても仲がいい。

「りかこちゃん!!」

「みんな見て―健から指輪をもらいました!!」

「安もんだけどな←←」

「すげえ―!!」

「よっし!!二人の記念日ということで、乾杯でもするか??」

「うん」

「乾杯」

あの日、酔ってみんなに迷惑をかけちゃって…。みんなと飲む時は、一人だけ、ジュースにしている。それに、健とも約束したから…。

「ねえーねえー今度みんなで遊びたいー!!」

「あーそうやなあー俺らもたまには外に出なきゃな!!」

そう言って、賛成してくれたのは、海斗だ。

「りかこの提案なら、俺はOK」

健は、もちろん賛成してくれた。

みんなも賛成してくれて、

今度の日曜日に読売ランドに行くことになった。

日曜日の朝。

みんながハチ公前に集まった、

遅刻は祐と優雅と智毅と隆だった。

電車を2回ぐらい、乗り換えて読売ランドに着いた。

みんなで乗ったのは一番怖いジェットコースタだけだった…。

それでも、みんなで過ごした、時間はとっても、楽しかった。

歩いていると、パンジージャンプがあった。

「じゃんけんで負けた、3人が上から飛ばうぜ」

そんな提案をしたのは、盛り上げ役の優雅だった…。

「やろうぜ!!」

みんながのった。

「じゃあ、いくぞー」

と、海斗が言った。

結局、負けたのは、言い出しっぺの優雅と、健と、海斗だった。

「大丈夫??」

健が、心配だった。

さっき、ジェットコースターに乗った時に何となく、無理していたような気がしたから…。

「当たり前だろ!!ちゃんと見とけよ」

「頑張ってね」

3人が上に上がった。

最初に飛び降りるのは、優雅だ。

「行くぞー」

大きい声で叫んで、かっこよく飛び降りた。

「すごいー」

思わず、声に出してしまった。

2番目は、海斗だ。

海斗はみんなに「見とけよ」って、言って…。すぐに飛び降りた。

3番目は、健だ。

「健先輩大丈夫かなあ、確か、パンジージャンプとか、そういうの無理じゃなかったけー!?」

下で見ていた龍雅が言った。

「えっ!! そうなの??」

どうしようー??

さっきは、大丈夫とか言って、大丈夫じゃないじゃん!!

「健ー頑張れー!!」

頑張れ!! 頑張れ!! 心のなかで何回も何回も繰り返した。

「りかこのこと好きやー」

健が飛び降りた。

とっても、とっても、かっこ良かったよ。

3人が下に降りて来た。

「けーん」

健に飛びついた。

「ちゃんと、見てたか??」

「うん。かつこ良かったよ」

「あー緊張したから…お腹すいたわ」

「俺もー」

お昼時だし、近くにあったラーメン屋でご飯を食べた。

「8時やで!!大丈夫かあ??」

健が時計を見ながら、言った。

今日も塾ないし、適当に親に理由を付ければ、余裕だった。

でも、遅くなって、グチグチ言われるのが、面倒くさかった。

「大丈夫だよ。でも、8時かあーじゃあ、ご飯食べたら、帰ろっかなあー??」

「じゃあ、送るわ」

「サンキュー」

ご飯も食べ終わり、みんなはまた、たまり場に戻るらしい。

「じゃあなあ!!」

りかこ達はみんなと違う方面だった。

「バイバーイ」

「今日楽しかったね」

「おう」

「今度は、ディズニールランドに行きたい」

「お姫様は大変だなあ」

「そんな事ないし」

そんな話をしながら、家まで送ってくれた。

「ありがとうね」

「じゃあな」

世界中のみんながりかこの敵になっても、健だけは、りかこの見方だから…。

いつまでも、いつまでも、そう思って居たかった。

第四章 汚い

11月11日、今日は健と新宿にある花園神社に来た。

お祭りの為たくさんの人で溢れていた。

「け〜ん〜何か、食べたいー!!」

健は、タバコを吸いながら：聞いてない。

「健!!」

「ゴメン、ゴメン、どうした??」

「お腹すいたわ」

「何食べたい??」

「ん〜ともろこし!!」

「はいよ」

「やったあーありがとう→」

「美味しいか??」

「うん。美味しい!!」

「お前、歯にとうもろこしが付いてるぞ!!」

「うそ」

「どこ―?」

「取ってやる!! 動くなよ!!」

「えっ…うん…」

歯と歯の間に挟まった、
とうもろこしを健が取ってくれた。

恥ずかしい。でも、嬉しい。

「よし!! 取れた!!」

「ありがとう」

「お参りするか??」

「うん…する→→」

「いくら入れる??」

「100円でいいか??」

「これは、自分でお金出すよ」

「良いつて、俺のお金はお前のお金だから…」

そういえば、健と一緒に居て、お金を払ったことがなかった。

「うん」

100円を賽銭した。

手を叩き…願いごとを言った。

「いつか、俺とりかこの赤ちゃんが産まれますように」

「これからずっと、ずっと、一緒に居られますように、そして、健との間に一つの命が舞い降りますように」

「神様、ウチらの願いごと叶えてくれるかなあ??」

「どうだろうなあ―でも赤ちゃんは、

りかこは2月1日が誕生日で、俺は8月18日が誕生日だから、足し算して、俺らの子は10月19日がいいな―」

「10月19日、早く来ないかなあ―」

「利佳子は気が早いなあ―」

「そんな事ないもん!!」

「よし、お参りしたしどっかでご飯でも食べるか??」

「うん。でも、新宿あんま分かんない←←」

「そばとかで良いか??」

「良いよ」

歌舞伎町通りまで歩いて、その先に蕎麦屋があった。

行く途中…。

「タバコ買って来てもいいか??」

自動販売機を見つけたらしい。

「いいよ!! 待ってる」

健がタバコを買いに行った。

そのすきを見て、2人の男がりかこの方に来る。

怖かったから：携帯で電話をしている振りをした。

「ねーねー可愛いね」

「さっきの彼氏??」

無視して電話をしている振りを続ける。

「電話してる振りしてるの分かってるよ…。」

バレてた。ゆっくりと携帯を下ろした。

「用事あるので…」

健の方へ行こうとした瞬間、1人の男に手を掴まれた。

「ちょっと待ってよ、もうちょっと、楽しませてよ!!！」

男に両手を掴まれている。とうとうとしながらも、力が強くてとれない。

助けて…健。

「じゃあ、まずキスしちゃおうかなあ—」

「やめてよ!!！」

男の顔が近づいてくる。

手も掴まれていて、避けられない。

健…健…。

男の唇と利佳子の唇が重なった。

男は舌を入れてきた、興奮してきたのか、周りを見ながら、利佳子の胸を揉み始めた。

もう、抵抗する気力もない。

「ふざけんなよ!!」

誰?? 健だ。健が来た。
健が1人の男を殴った。

もう一人の男は、胸ぐらを掴み、激しく睨みつけ、

「人の女に手出してんじゃね!!」

と言った、男達はびっくりした様子で走って逃げて行った。

その場に座りこんで泣いた。

「大丈夫かあ??」

健が走ってかけ寄って来て、抱きしめた。

「ゴメン」

健を離れた。

抱きしめてくれてるのは、健なのに、
さっきの記憶が頭から：離れない。

健は泣いている利佳子の手を引っ張りながら、
どこかへ歩き始めた。

着いたのは、ラブホテル。

部屋に入り、利佳子を椅子に座らせた。

利佳子から、一人分離れて健が座った。

「ゴメン、ゴメン、私…」

「ゴメンな、守ってやれなくてゴメンな」

「大丈夫だよ」

健がりかこを抱きしめた。

首から：ひとつ、ひとつ、確かめるように、キスをしていく、健がりかこをベッドに運び、着ているものを、優しく脱がせてくれた。

「大丈夫か??」

「うん」

さっきのを忘れさせてくれるかのように、何回も何回もキスをしてくれた。

「部屋明るい…」

電気を消して、テレビを消音にしたまま、つけっぱなしにした。

そして、その夜、りかこと健は初めて、一つになった。

健が悲しいことも、苦しいことも全部忘れさせてくれた。

第五章 大切な日

12月24日今日はイブだ!!

クリスマスも今日も、健と過ごすつもり、クリスマスぐらい、大好きな人とずっと一緒に居たい。

だから、親には、さらの家泊まることにして、健の家泊まる。

健とは、もう何回も遊んだけど泊まりは初めてだ!!

もうひとつ緊張している理由がある、

それは健のお父さんとお母さんに会うこと…。

そのこともあって、今日は5時に目が覚めてしまった。

さっそく、洋服選び。

スーツ??

ワンピース??

スカート??

ジーパン??

いろいろ試してみるがどれも微妙だ。

1時間悩み…ワンピースを来て行くことにした。

化粧は、健の所に行く前に、

裕美にやってもらったことになっている…。

いちお、泊まりだから、必要なものをバックの中に入れて、裕美の家に行く。

ピンポーン

「りかこく?？」

「うん!!」

裕美が中なら出て来た。

「おっはあ」

「朝早くゴメンね←←」

「何来て行くのかなあと思ったら、ワンピースかあ——?？」

「えっ!! 1時間も悩んだんだけど…変かなあ??」

「ん…ちよつとね、洋服貸してあげよっか!？」

「うん!! まだ時間あるし、貸して——!!」

「OK→→とりあえず、入って——!!」

「おじゃまします——」

裕美の部屋に行く途中…。

リビングで裕美のお母さんに会った!!

「りかちゃん!! おはよー」

「おはようございます。朝から早くにすみません。」

「仕事で出かけちゃうけど、朝ご飯も作っておいたし、ゆっくりして行っね。」

「あっ!! ありがとうございます」

「りかこー」

2階で裕美が呼んでいる。

「失礼します」

裕美のお母さんに挨拶をして、2階にある、裕美の部屋に行く。

「この中から、好きなを選んで…」

見ると、ベッドの上に何着か上下セットになっておいてある。

どれもとっても、可愛い。

「どうしよう?？」

「コレとかは?？」

「着てみるね」

さらが選んだのはスカートので、上がセーターだ。

クリスマスっぽくって可愛い。

「どう?..?」

「可愛いじゃん→→」

鏡で見て見る…。

「可愛い!!」

「じゃあ、化粧するね」

「うん。お願いします→→」

—30分後

「出来た!!」

鏡を見る。別人のように、変わっていた。

「ありがとう」

裕美に飛びついた。

「めっちゃ、可愛いよ!!」

「あっ!! さっき、裕美のお母さんが朝ご飯作ってくれてるって」

「まちで!! 食べよう」

「「いただきます」」

裕美のお母さんが作ってくれた朝ご飯を食べながら、健の話や慎吾の話で盛り上がった。

ご飯を食べ終わるとちょうど、12時ぐらい…。

裕美にお礼を言って、健との待ち合わせ場所に行く。

待ち合わせ場所は恵比寿!!

健はもう、来ていた。

「け〜ん〜」

「よっ!!」

「何で、そんな大きいバック持ってるの?」

「大きくないよ!! いろいろ持ってくるものあったし」

「持つよ!!」

「ありがとう」

「お昼食べたか?」

「まだ―」

「俺の親…今居ないんだけど、
ご飯作って行ったらしいから、それで良いか?？」

「全然良いよ→→」

健の家は駅から、歩いてすぐ着いた!!

「お邪魔します―」

「誰も居ないから…言わなくても良いよ」

「えっ!!でも、靴あるよ」

「まちで!!」

「うん」

ブーツと子供用の靴があった。

「姉貴と弟いるかも!？」

健は3人兄弟。

健は真ん中。

一番上にはお姉さんが居て、高卒でキャバ嬢をやっている、
一番下にはまだ1才の弟が居る!!

「嘘!!心の準備出来てないし」

「大丈夫だから!!」

健の手を握りながら、リビングに行く。

「姉貴」

「紹介するな!! 俺の彼女の利佳子!! 今日泊まるから」

「戸山 利佳子です。よろしくお願いします」

「よろしくってか、健!! ようすけの事見てて――!! 仕事行ってくるから…」

弟の名前は洋介と言うらしい。

「俺ちょっと、2階に行って来るから、ちょっとの間、りかこ…あいつの面倒見てもらっても良いか?」

「えっ!! 分かった」

「来て早々ゴメンな」

「大丈夫だよ」

「じゃあ、2階にバックも置いておくな」

「了解」

「ゴメンね!! じゃあ、りかこちゃんお願いね」

「あっ!!はい」

お姉さんは仕事へ行ってしまった。

その時、お姉さんが居なくなっただからか、泣き出してしまった。

どうしよう??と思い、取りあえず抱っこした。

赤ちゃんとかは嫌いじゃないし、世話とかは、得意!!

何回かあやしてたら、泣き止んだ。

「大丈夫かあ??」

健が来た。

「余裕だよ!!」

「洋介もご飯食べてないらしいから…。一緒でもいいか??」

「いいよ」

「じゃあ、準備するから、もうちょっと、洋介のこと頼むな」

「OK」

近くにあった、ミッキーのぬいぐるみを取り、渡すとても喜んでくれた。

まだ、1才…言葉何か喋れない。

でもとっても可愛い。

「準備出来た!!」

「洋介ここ座らせるの??」

赤ちゃんが座るような席を指差しながら、聞いた。

「うん!! よろしく!!」

メニューは、焼きそば。

洋介はお粥みたいなのだ。

「いただきます」

洋介はまだ、1人で食べることが出来ないから、健が食べさせていた。

「何か、新婚生活しているみたい!!」

「いつか、絶対そうなるうな!!」

「うん!!」

健には、赤ちゃんの世話とか、ちょっと似合わなかった。

でも、優しい健を見るのは好きだった。

食べ終わって、洋介は寝てしまった。やっと2人になった。

「騒がしくてゴメンな」

「大丈夫だよ!!」

健の部屋とかいろいろ見たり、
くだらない話をしているとあっという間に15時!!

「夜さあ、クリスマスツリーどうする??」

今日か、明日の夜に2人で…
六本木にあるクリスマスツリーを見に行く予定だった。

「今日行くか??」

「んゝ明日の夜はそんな遅くまで入れないから、今日行きたい!!」

「了解!!じゃあ、19時ぐらいに行くか??」

「いいよ→→」

「てか、何か聞こえない??」

「ヤバイ!!洋介起きた」

洋介の泣き声だった。

何とか、泣き止んで…オムツを取り替えた。

18時になり、健のお母さんが帰って来た、

30分後、お父さんも帰って来た。

「帰って来たみたいだね!!」

「じゃあ、報告行くか!!」

「待って!!」

大きく息を吸って、深呼吸した。
健と手を繋いでリビングに行く。

「話があるんだけど、良いか??」

健も緊張しているみたいで繋いでいる手が震えていた。

利佳子と健と、健のお父さんとお母さんが向きあって座った。

「紹介する!! 俺の彼女の利佳子」

「初めてまして。戸山 利佳子です」

「初めてまして」

健のお母さんが、笑顔で答えてくれた。

「健のことをよろしくお願いします」

健のお父さんも、お母さんも受け入れてくれたみたいで嬉しいかった!!

「こちらこそ、よろしくお願いします」

一通り挨拶が終わって、時間を見ると、19時過ぎだ。
健に時間が過ぎている事を伝える。

「俺らは、行かなきゃ行けないところがあるから…」

「失礼しました」

最後に挨拶して、2階に戻る。

思ってたより、とっても、優しい人だった。

「緊張した」

でも、否定とかされなくて、本当に、良かった。

「じゃあ、行こう」

「おう!!」

家を出て、六本木に向かう。

六本木のけやき坂は、本当に綺麗だった。

「け〜ん〜見て!!めっちゃ綺麗だよ」

クリスマスツリーのイルミネーションがとっても綺麗だった。

「綺麗だな！！写メでも撮るか??」

「うん」

「撮るよー！！」

健の携帯に2人でポーズしながら撮る！！

「撮れたー??」

撮った、写メを見てみる…利佳子も健も幸せな顔をしていた。

「りかこの携帯に送っておいて」

「おう！！」

ツリーの傍のベンチで座る健に、内緒で買ったプレゼントを渡す。

「1日早いけど、プレゼント！！」

「俺も、用意した…はい！！」

「ありがとう」

りかこが渡したのは、指輪と香水。

「ありがとうな」

「うん→→指輪付けてあげる！！」

「似合うか??」

「めっちゃ似合うよ!!」

お互い付けている指輪を重ねた。

「大好きやで!!」

「大好きだよ」

ツリーの下でキスをした。

もう一つは香水、一時間悩んで、健に合う香水を決めた。

「健の開けていい??」

「おう!!」

中に入っていたのは香水だ。

りかこも健も香水を買っていた…
顔を見合わせて笑った。

「じゃあ、お互いつけて帰ろう」

もらった香水をつけた。

とっても良い匂い。

「帰るか??」

「うん。帰ろう」

いつもなら、帰るのが嫌だけど、今日は健の家!!

明日の夜までずっと、一緒!!

家に着いたのは21時。

洋介が寝ているから、静かに…2階に上がった。

「そういえば、まだ、夜ご飯食べてなかったな!!」

「そうだね」

「どうしょっか??」

リビングに何か、食べる物ないか見に行く。

まだ電気がついていた。

中にいたのは…健のお母さんだ。

「お帰りなさい」

軽く会釈をする。

「何か、食べるものあるか??」

「テーブルの上にちゃんと、二人分置いておいたわよ!!」

「食べるか!？」

「食べる→→」

「いただきま〜す」

食べ終わって、また2階に上がる。

部屋の中には、ベッドの下に布団がひいてあり、
2つ用意されていたパジャマに着替えて布団に入る。

健が上で、りかが下の布団に入った。

「健…上の布団行っても良い??」

「良いよ」

健の布団に潜り込んだ。

その日、りかこと健は…健の部屋で一つになった。

健の温もりとか、今、

健の近くにいる事が本当に、幸せだった。

次の日、2人とも起きたのは12時過ぎ!!

「起きたか??」

「うん!!」

「おはよう」

「おはよー」

布団の中でそんな会話した。

「起きるか??」

「寒いー!!」

昨日、そのまま寝てしまったため、服が乱れていた。

「飲み物でも取って来るな」

「分かった!!」

健が下に飲み物を取りに行った!!

その間、乱れた服を急いで直す。

「はいよ」

「ありがとう」

ジュースの缶を2本持って来てくれた。

「健がジュースとか、似合わない!!」

「まだ、起きたばっかだしな」

「カーテン開けるで」

「うん」

「雨降ってるね←←どこも行けないじゃん!!」

「どっか行きたい所あるか??」

「んゝみんなで、クリスマスパーティーやりたい!!」

「よっし!!やるか」

「本当に??」

「おう!!」

「やった→→」

「海斗たちに電話してみるな!!」

「うん」

健が部屋を出て…電話をしに行った。

神様、りかこは今、

健とクリスマスを向かえることが出来てとても幸せです。

「どうだった―?？」

「OKやって―!! いつでも、来ていいって」

「じゃあ、ご飯食べてから行こう!!」

「じゃあ、下行って…何かあるか見て来るな!!」

「りかこも行く―!!」

テーブルの上には、二人分のご飯が、用意されていて、置き手紙が置いてあった。

「健へ」

お昼を作っておいたので、食べて下さい!!

「りかちゃんへ」

また、いつでも遊びに来てね。昨日は洋介のお世話をしてくれたみたいでありがとうございました。

「お昼ご飯とか言って、もう15時だし!!」

健が吐き捨てるように言った。

「良いじゃん!! 食べよう」

「おう!! 食べるか!!」

ご飯は、2人分のエビチリとサラダと前菜がだった。

ご飯も食べ終わり、いつものたまり場に行くことに!!

ピンポン

「今、開けるで」

「よっ!!」

「よし、全員揃ったな!!」

「乾杯するで…」

「「メリークリスマス」」

「さっきみんなでケーキ買って来たんや!! 食べるか??」

「食べようぜ!!」

ケーキはショートケーキ。

利佳子達が来る前に買って来たらしい。

みんなでクリスマスケーキを食べた!!

こんな…なにげない、みんなの優しさで、いつも利佳子は支えられていた。

そして、健が支えてくれた。

第六章 すれ違い

クリスマスも一緒に過ごし、

年明けのカウントダウンも、

電話だけで一緒に数えて、年を迎えた。

りかこの誕生日もケーキを買って来てくれて、ネックレスもくれたよ。

それ以降も何回も遊んだ。

でもね、りかこは気づいていたんだ、健の態度が前とまったく違うことに…。

「おはよー」

今日も健と渋谷で待ち合わせ。

「行くぞ」

「うん」

最近、行く場所は…決まってライブハウスだ。

前みたいに、「どこ行きたい」とかは、聞いてくれない。

ライブハウスに着いて、椅子に座わらせられる。

「待ってろ!!」

「うん」

りかこは、いつもこうして、30分ぐらい、椅子に座って待ってる。

待ってる間、健以外の男の人から、「遊ぼうよ」とか、

「個室行かない??」とか、いっぱい声かけられるけど、

「彼氏居る」って言って断る。

健は心配じゃないの??

いつも、りかこの隣には健が居ると思っていた。

健が帰って来た。

「けんどこ行ってたの??」

「ちょっとな!!」

「そっか!! りかこのこと好きだよね??」

「好きだよ」

たまに、不安になる。

この言葉信じて良いの??

分かんない。

でも、りかこは健が好きだから、大好きだから…。

そう言って、健はりかこの体を倒し、体を重ねる。

でもね、いくら愛し合っても、前とは…何か、違った。

ライブハウスから出たら…もう19時。

「もう、帰らなきゃ!!」

「送るよ」

「ありがとう」

「後ろ乗れよ!!ちゃんと、捕まってるよ!!」

「うん」

今日は自転車。

健の背中に手を回した。

いつまでも、いつまでも、この手を離したくない。

「着いたで!!」

「ありがとうね!!」

「おう!!」

「またな」

「バイバーイ」

何で、送ってくれるの??

健の気持ちが分からない。

「もしもし」

久しぶりの裕美からの電話。

「もしもし!! 久しぶり」

「元気!？」

「うん!! 元気だよ」

元気…そんなの嘘!!

本当は、健の気持ちが分からなくて泣きそう。

「今度さあ、ダブルデートしよう」

「ダブルデート??」

「嫌だ??」

「良いよ」

思わず、口が滑った。

裕美と慎吾はラブラブだ。

でも、りかこと健は…でも大丈夫だよね。

「本当に!!」

「うん」

「じゃあ、日曜日…新宿ね」

「了解」

さっそく、健に電話した。

「もしもし」

「どうした?」

「あのさあ、文化祭でりかこと一緒に居た裕美って子覚えてる?」

「覚えてるよ」

「その子が今度、ダブルデートしようって…どうする?」

返事は返って来ない。

「健が行きたくないなら、行くの辞めよう!!」

「良いよ」

「じゃあ、日曜日に新宿ね」

「分かった」

日曜日…全員、集まった。

「どこ行く?」

「ちょうど、お昼時だし何か、食べるか?」

「OK」

「賛成!!」

「健は???けん?」

「あっ!! 良いよ」

近くにあったファミレスに入った。

「健…さっき、上の空だったけど大丈夫?」

「大丈夫だよ!!」

何か、考えごとしてたのかな??

やっぱり、来たくなかったのかなあ??」

お会計は、慎吾が裕美の分を、健がりかこの分を払ってくれた。

「よし!! 次はどこ行くか??」

「ラブラブな4人でプリ撮りたい→→」

裕美のテンションが上がってきた。

ラブラブ：今、その言葉は聞きたくなかった。

「行こう!!」

裕美がりかこの手を掴み、仕方なく行くことに…。

「じゃあ、まずは4人で撮ろう!!」

裕美と慎吾は撮り慣れてるみたいだった。

りかこと健は2・3回しか撮ったことがない。

「出来た!!」

4人でのプリが完成した。

「じゃあ、次は2人ずつ撮ろう」

と言って、慎吾と裕美はどこかの機種に入って行った。

「俺らはココで良いか?」

「うん」

近くにあった機種に入った。

5・6回撮り、最後の一回…。

健が、下を向いていたりかこの顔を上げ…キスをした。

「キスプリになっちゃった!!」

「顔赤くなってるで!!」

「だって…」

だって、今の健がキス…してくれると思わなかったし、態度が冷たかったから、ずっと不安で…。

健とりかこのプリが出てきた。

半分に分けて、健に渡す。

「健…携帯貸して!!」

健の携帯にりかこと健のプリを貼った。

「終わった?」

裕美だ。

「終わったよ!!」

「さっきね、次…行く場所考えてたんだけど…カラオケ行かない…?」

「良いよ」

カラオケは…あまり得意じゃないけど、今は健にキスされて、調子が良かった。

「誰から、歌う…?」

「俺、歌う—!!」

最初は慎吾が手をあげた。

慎吾が歌ったのは、

「湘南乃風 純恋歌」

何気にめっちゃ上手かった!!

「じゃあ、次は俺!!」

健だ。

健とカラオケ何て、来たことがない!!

だから、健の歌を聞くのも初めて…。

健が歌ったのは、

「モンゴル800 小さな恋の歌」

健の後は裕美。

裕美が歌ったのは

「B O A G r a c i o u s D a y s」

裕美が歌い終わり、

最後はりかこ。

何歌おう??? どうしよう??

悩み決めた曲は、

「小柳ゆき m y a l l」

健に対する思いを精一杯歌った。

健を信じて良いの??

健を好きでいて良いの??

第七章 思い

健とりかこと慎吾と裕美で遊んで以来、1週間ぶりに健に会う。

今日は、みんなで前から、計画を立ててた。

ディズニースーに行く。

「みんな!! おはよー」

「おはよー」

「よっ!!」

健が居ない。遅刻かなあ??

「あれ!! まだ、健は来てないの??」

この時、何で気づかなかったんだろう。

みんなの表現が変わったことに…。

「今日は、あいつ休みみたい…。」

「えっ!! 何で??」

「風邪みたい…」

昨日、電話したけど、そんな事言ってなかった。

「そっかぁー！！健に電話かけて来る！！」

健…大丈夫かなあ？？

何回も何回も電話をかける…呼び出しされてるのに出ない。

何で？？

「健…出なかった！！」

「まぢかぁー」

「あっ！！でも、心配しないで行って来いって、言ってたで…。」

「そっかぁー！！じゃあ、行こう」

何で、この時のりかこは一つも疑わなかったんだろう。

この時、気づいて居れば、まだ、状況は変わったかもしれない。

デイズニーシーに着いた。

「何乗るか？？」

「んーアリエルのショーみたい！！」

「よっし！！行こう！！」

今日、一日みんな…りかこの好きな所に連れて行って、好きな乗り物にやらしてくれた。

「今日はありがとうね!!」とっても、楽しかった」

「おう!!」

「じゃあな」

「バイバイ」

さっそく、今日のことを報告しようと思って、健に電話をかける。

「もしもし」

「もしもし」

「風邪大丈夫??」

「おう!!」

「ディズニ―シーとっても、楽しかったよ!!」

「良かったな」

「ねえ―!! 今日…会えなかったから、今週の日曜日遊ぼ―??」

「おう」

「じゃあ、13時にハチ公ね!!」

「おう！！じゃあな」

「バイバーイ」

何か、冷たい。

まっ！！今週の日曜日、たーくさん遊べるから、我慢しよう。

日曜日。

朝から…めっちゃウキウキ。

待ち合わせ場所に行くと、健は居ない。

15分後、健が来た。

「久しぶり！！」

「おう」

「どこ行くー？？」

「お前、俺のこと好きかあ？？」

「好きに決まってんじゃん！！」

「行きたい場所がある！！」

「えっ!!どこに―??」

「着いてこい!!」

「うん」

着いた場所はラブホテル!!

何で、分かんない。

個室に入る。

「脱げ!!」

「何言ってるの??」

「早く!!」

「けん??」

「俺のこと好きだったら、脱げよ!!」

健の言葉が理解できない。

でも、気づいた時は、健に脱がされていて、健と体を重ねていた。

1つ1つ確かめるように、キスをする。

何回も、何回も、ベットの途中で、1つになった。

でも、いつもの健じゃない!!

こんなの変だよ。

一方的なんて、変だよ。

「健…?」

「何!!」

「何か、あったの?」

「別に…。」

「健はりかこのこと好き?」

「おう」

「良かった」

そして、また体を重ねた。

気づいたら、2人とも寝ていた。起きたら、20時…。

「健…起きてる?」

「おう!!」

「帰らなきゃ!!」

「何時?？」

「20時…。」

「送るよ!!」

「ありがとう」

家まで、送ってくれた…。

結局、今日はラブホテルにずっと居た。

それでも、りかこは良かった。

健が好きだから。

あれから…何回も会った。

いつか、また、前みたいに健が優しくしてくれるって、信じて…。

でも、行く場所は変わらなかった。今のうちらって何?？

何回も考えてた。

でも、分かんない。

今日は、たまり場に行く。

健が最近、態度が冷たいことを相談にのって欲しかった。

1人でたまり場に行くのは、初めて…。

だって、隣には健が居たから。

着いた!!

ピンポーン

「はいよ!! 今、開けるで」

「誰や??」

今日は、みんなを驚かそうと思って、何も言わないで来た。

ドアが開いた。

「りかこだよ!!」

中から出て来たのは、海斗だ。

海斗は一気に挙動不審になって、顔色を変えながら言う。

「今日、帰った方が良いで!!」

「何で??」

「聞かない方がいいと思う」

ふっと、下を見ると…。

：健の靴がある。

「中に健居るの??」

海斗の返事を待たないで、中に入る。

「お邪魔しますー」

中に入る。

一瞬夢かと思った。

夢であって欲しかった。

見たくなかった。

健が知らない女の子とキスをしている。

床にはたくさんの葉が散らかっている。

部屋から：飛び出した。

走って、走って、どこまで走り続けた。

知らない、場所に着いた。

頭の中、整理出来ない。

その場に座りこんだ。

こういう時に限って、健がくれた…香水の匂いいつもよりする。

健がくれた…ネックレスも、健がくれた…指輪も…いつもより輝いて見える。

健はりかこ以外の人とキスをして、抱き合っていた。

葉もあつた、どういう事??

健はきつと、気づいてなかったよね。

「好き」って、言ってたのは嘘??

もう、健はりかこに振り向いてはくれないのかなあ??

その場に泣き崩れた。

指輪とネックレスを外した。

ネックレスは、投げ捨てた。

指輪は、健に会って直接、返す。

もう、終わりなのかな??

第八章 伝えたい

1週間、健とは連絡をとらなかった。

健から、何回か電話が来たこともあった。

でも、逃げちゃいけないと思った。

ちゃんと、健に指輪を返さなきゃ…。

ちゃんと、言いたい事言わなきゃ!!

健に電話をした。

「もしもし」

「お前、連絡ずっと、避けてただろ!!」

久しぶりに健の声を聞いた。

「ごめん。」

「別に、良いけど…」

「あのさあ、健に会って話したい事があるんだけど…」

「何???電話じゃダメなの???」

健は何も分かってない!!

そんな冷たい態度に、涙が溢れた。

「だ…め…会い…た…い」

「泣いてんのか??」

「泣い…て…な…い!!」

「今日、いつものライブハウスに居るから、来いよ!!」

「分…か…つ…た…」

「じゃあな」

「う…ん…」

電話を切り、ベットに顔伏せた。

でも、健に会うのに、目を赤くして、会いたくない、どうにか泣き止んだ。

着替えて健の居るライブハウスへ向かう。

ライブハウスの中の一番奥に健は居た。

健の手を見ると、指輪が付いてる。

そういえば、たまり場に行った、あの日も指輪が付いていた。

どうして?..?

「話って、何?..?」

「あのね、この前…たまり場に行ったの!! 健が、女の人とキスしてるの見た!!」

「だから何!..?」

「だから何って!! ウチら付き合ってるんじゃないの?..? 指輪付けてるじゃん!! もう、良い!! これ返すわ」

指輪を返した。

その時、健の目が少し、泣きそうになってたのが、分かった。

「…帰る!!」

指輪を健に持たせて、一方的に帰って来た。

健の泣き顔なんて見たくないし、

何で健が泣くの?..?

女の人とキスしてたのは健の方だよ!!

分かんないよ。

その一週間後、利佳子がコンビニに行く途中…。

前の方から、健たちが歩いてくる、あれ以来会って居ないし連絡も
とっていない。

最初は見間違いかと思ったけど、
りかこの家と、健たちの○×学校は近いから、会ってもおかしくは
ない…。

先頭に健と海斗がいて、後ろにみんなが居る。

どうしよう???

でも、今、引き返したくはない。

音楽も聞いていたし、サングラスもかけているから、きっと分
かんない。

そう信じて、下を向きながら、一歩ずつ歩く。

誰かがりかこの顔を除いて来た。

「やっぱ、そうだ!! りかこだ!!」

誰!?! 龍也だ。

ふっと、健を見ると、どこか悲しそうだった。見ない振りをし
て通り過ぎた。

今は何も喋りたくない。

その二週間後。

深夜一時：海斗からの突然の、電話。

「健がさっき、交通事故にあって今、救急治療室に居る!!
明日学校終わったらで良いから、来てやって!!」

声がでない。

海斗の言ってることが分かんない。何言ってるの??

「嘘だよね??」

「嘘でこんなこと言うか!!」

「大丈夫なの??」

「何とも言えない」

突然過ぎて涙もでない。

本当は、今すぐ家を飛び出したい。

でも、健に合わせる顔がない、
指輪も返しちゃた。

次の日、学校に居る間、ずっと考えた。

行くべきなのか??

でも、もし…もし、健に何かあったら??

そう思ってる間にりかこは、病院に走っていた。

看護師さんに、健が居るところを聞く…。

―405号室

…401…402…403…404…。

部屋の前で健の家族や裕美や慎吾が居る。

みんな、泣いている。

何で、みんな泣いてんの??

部屋の中には海斗たちが居る…。

健の顔に白い布が被さっている。

何で???

ゆっくりと、布を取る。

「健…りかこだよ!!」

「寝てるの??」

「健…健…!!返事してよ!!」

「りかこ止めろよ!!」

「健…健…!! ねえ―起きて!!」

「海行くんでしょ?」

「世界一幸せな家庭作るんでしょ?」

「クリスマスも毎年プレゼント交換して!!
一緒に年を迎えるんでしょ?」

「止めろって!!」

海斗がりかこを止める。

「嫌…離して!!」

「お願い!! 目を開けて…」

「健…りかこを置いて行かないで」

健に抱きついた。

体が冷たい。

「俺がお前に電話した1時間後に息を引き取った。

電話しようとしたけど…健がかっこ悪い姿は見られたくないって、

健が死ぬ前に…お前のこと幸せにしてやれなくてゴメンって、

ずっと、ずっと、あいつ、お前のこと好きやったんだ。

冷たい態度も、お前が好き過ぎて…。

でも、あいつは俺なんかよりもっと、将来性のある人の方が良いって、

だから、わざとお前に嫌われるようなことしたり、

薬とかに手出したりして、自分に言い聞かせてたんだ。

こいつの気持ち分かってやってあげてな!!」

今の利佳子にそんな事言われても、目の前の事でさえ、

理解出来ないのに、そんなこと言われても、海斗が何言ってるのか分かんない。

りかこは健の傍から、動くことが出来きず、その場に座りこんだ。

神様お願いします。

健を連れて行かないで。

健にまだ、伝えてないこといっぱいある。

一緒に行こうって、約束した場所もある。

お願い。目を開けて…。

誰か嘘だと言って。

そんな、ささやかな願いは、健に届くことはなかった。

その日、誰とも喋ることはなく、一睡もしないまま、次の日の朝が来た。

第九章 大好き

昨日家に帰って来てから、ずっと、部屋に閉じこもって居た。

みんなから、電話が来てたけど、出ることはなかった。

その時、外で「りかこ〜」って、呼んでる声が聞こえた。

海斗たちかなあ??

カーテンを開ける。

朝の光が差し込んで来る、やっぱり海斗たちだった。

「おはよう!!」

「上がったも良いか??」

喋ることが出来ず頷いた。

みんな、黒い服を来ている。

今日は、葬式だった。

カギを開け、みんなが入って来る。

目の下が腫れてる、みんなも辛いんだよね。

利佳子の為に明るく振る舞ってくれて、ありがとう。

「「お邪魔します」」

「これ、お前に渡そうと思って…」

海斗が差し出したのは、結婚届けと、指輪だった。

「結婚届けは、正式には出来ないけど、あいつ書ける所は全部書いて…」

正式に結婚出来る日まで、預かっていてくれって言われて…。

ずっと…俺が、預かってたんだ。

指輪は健の指輪。お前の指輪は、健が付けてる。

あいつの1人で結婚式とか言っって、指輪交換してたで…。」

「ありがとう」

今にも、溢れそうな涙を堪えながら、結婚届けに利佳子の名前を書く。

「お通夜…来れるか?？」

首を横に振った。

「分かった、結婚届けは、健に…ちゃんと見せるから」

結婚届けに利佳子の名前と健の名前が入った。

「じゃあ、俺たちは行くな」

「じゃあな」

お通夜には行かない、だって…健は死んでない。

りかこの中で生きてるから。

これからもずっと…。

りかが来た場所は、健とまた一緒に来るって、約束をした…。

湘南の海

海岸を1人で歩いた。

空は、とっても、晴れ晴れとしている。

健…りかを置いて行かないで。

ただ、それだけがりかこの願いだった。

最後の最後まで、健の気持ちも知らないで、強がってゴメンね。

健は、りかこのこと幸せに出来ないって言ってたけど…そんなことないよ。

とっても、幸せだったよ。

確かに、健は未成年なのに、たばこを吸って、お酒を飲んで、利佳子の為に利佳子の事を傷つけた人殴って、どうしようもなかったよね。

でもね、それでも、りかこは健が大好きだよ。

たばこを吸ってる健も、

お酒を飲んでる健も、

利佳子を守ってくれた健も、

全部、大好きだよ。

今でも、これからもずっと…。

やっぱり、最後に健に会いたい。

会って伝えたい、

「大好き」だって。

「幸せ」だったって。

時間は、17時…一番早い電車に乗れば間に合う。

走って、駅まで行き、新幹線に乗り、何とか間に合った。

「来たんやな!!」

海斗だ。

「うん、健に伝えたいこと言ってなかったから…。」

健のお通夜には、大勢の人が訪れていた。

その中には、健の笑顔の写真を見て、涙を流す人もいた。

それでも、りかこは健がこの世から、居なくなった何て思えない。

どこかでまだ生きているようにさえ思えた。

参列者の列の一番最後に並んだ。

健の目の前に来た。

手を合わせた。

健…大好きだよ。

幸せだったよ。

その一言を伝えた。

「りかこちゃん!？」

「はい」

健のお母さんとお父さんだ。

「…ごめんね。あの子、ごめんね」

健のお母さんが涙を流しながら言う。

その姿を見て、堪えていた涙が溢れでた。

翌日、葬式が終わり、利佳子たちの所に健のお姉さんが来る。

「今から、健の骨を焼きに行くけど…人数多いから、

3人ぐらいにして欲しいんだけど…車の関係でごめんね。」

「りかこ行くか??」

「ここで見送る」

「本当に良いのか??」

「うん」

「じゃあ、俺と隆と優也の3人で」

健と同じ学年の高3が行くことになった。

健は大勢の人に見送られた。

…もう、健はいない。

あの声も笑顔も…ぬくもりも。

いろんな思いがあるけど…でも今、健に伝えたい事は

「ありがとう」

その事だけ…。

こんな恋があること教えてくれてありがとう。

利佳子のことを好きになってくれてありがとう。

いつも、いつも、家まで送ってくれてありがとう。

健…ありがとう。

第十章　ありがとう

一ヵ月後、みんなで健の家に来た。

「みんな、来てくれてありがとうね」

健のお母さんだ。

「あっ！！りかちゃんもありがとうね」

軽く会釈をした。

健に会いに来た事を報告する。

「りかこから良いよ」

「りかこは最後で良いよ」

みんな、健に最近の事とかを報告する。

一歩前に出て、手を合わせる。

今にも溢れだしそうな涙をこらえながら、健に話しかけた。

…健。元気ですか？？

あなたと会えなくなって、1ヵ月が経ちました。

まだ、どこかであなたが居るような気がします。

それでも、毎日、毎日、頑張って休む事なく、学校に行っています。

でも、どこに居ても、どんな事をしていても、

あなたのことを思い出すと涙が止まりません。

あなたが居なくなった今でも、りかこはあなたの事が大好きです。

これからもずっと…。

それから、学校のこととか、海斗たちのこととか、

時間も忘れるくらい…いっぱい、いっぱい話した。

話が終わっても、その場を動くことはなかった。

「りかこ!! 健のお母さんが俺たちにお昼を用意してくれたで…」

裕が言いに来てくれた。

「すぐ行く!!」

みんなが居る、リビングに行く。

「大丈夫か??」

「うん」

「りかちゃんもお昼食べてね」

「ありがとうございます」

「あっ！！　そういえば、健のもので何か、

欲しいものがあれば、持って行ってね！！

みんなに持っていつてもらった方がきつと、

あの子も喜ぶと思うから」

「はい。後で見えます」

海斗が返事をした。

「ご飯も食べ終わり、健の部屋に行く。

「りかこ何か、持っとくか?？」

「コレだけ持っとく」

健がいつも付けていた、ネックレスをもらった。

「じゃあ、俺らは帰るか!!！」

「うん」

健…また来るからね。

「お邪魔しました」

「また、たまり場戻るけど…りかこはどうする?..」

「行かない」

「そっかあ!!じゃあ、俺が送る」

そう言ってくれたのは、裕。

「でも、悪いよ」

「良いって!!」

「俺ん家の鍵…勝手に入っていて良いから」

裕が鍵を投げ海斗に渡す。

「じゃあ、後でな」

「おう!!」

2つに別れ、みんなは…たまり場に行った。

「りかこん家どっちだっけ?..」

「あっちだよ」

「寒いから、マフラーちゃんと巻いとけ…」

「うん」

正直、今のりかこに優しくして欲しくはなかった。

それに、何か違う…。

りかこの隣は健が居て、いつも、健が送ってくれてた。

でも、誰か一緒に居て欲しい気持ちもあった。

裕…ありがとうね。

「今日は、送ってくれてありがとう」

「おう!!」

「じゃあね」

「りかこー!!」

「えっ!!何!!」

「あいつが居なくなっても、お前が忘れない限りずっと…」

お前の中に居るし、それに、俺がついてるから…

だから、休まず明日も明後日も学校行けよ!!」

「うん」

「約束な」

「分かった」

「辛くなったら、いつでもたまり場来いよ」

「うん」

「じゃあな」

「バイバーイ」

正直、学校には行きたくない…けど、健の悲しむ顔も見たくない、だから、利佳子は…学校にはちゃんと行っている。

辛くなる時もあるけど、辛くなったら、たまり場来いよって言うてくれたし、

健はりかこの中で生きてるから…。

でも、健の笑顔はもう二度と、見れないんだね。

そう考えるといつも、涙が止まらない。

「もしもし」

海斗だ。

「も…しも…し…」

「大丈夫か?？」

「うん。」

「泣いてると思ったけど、やっぱり、泣いてたか!!泣きたい時は我慢しないで、いっぱい泣けよ」

「うん」

「寒いな―!!」

「うん」

「ちゃんと布団被って寝ろよ」

「うん」

「お休み!!」

「ありがとうね」

「おう」

「おやすみ」

次の日の朝、目も腫れてるし、やっぱり、学校には行きたくない。学校行っても、笑顔で笑えない。

その時、誰かから電話が来た。
裕だ。

「おはよう!! もう、起きた?？」

「うん」

「窓開けて外見てみ!!」

「えっ…うん。」

カーテンを開け外を見ると、裕が居た。

「今日は特別に学校まで送ってあげる!!」

裕が来ていなければ、怖くて学校には行っていなかったと思う。

裕だって、みんな…。

辛いはずなのに、心配してくれて、本当に、ありがとう。

来てくれてありがとう。

裕の自転車の後ろに乗る。

背中にしっかりと掴まった。

「着いたで!!」

学校は自転車では来ては行けない、だから、近くで下ろしてもらい

歩く。

「ありがとうね」

「学校終わったら、みんな待ってるから、たまり場来いよ」

「うん」

「頑張って行って来い」

「うん」

「じゃあな」

「ありがとう」

そして、学校に行った、やっぱり、健のことは誰にも言えない。

それに、学校来ても上の空になる事が多い。

学校が終わり、たまり場に行くはずだったけど、

やっぱり、一人で居たかったから、家に戻る。

そんな、毎日の繰り返し。

まだまだ、分からない事いっぱいある。

現実を受け入れられない事もいっぱいある。

怖くて1人になると毎日泣いちゃう。

健が居ればって、何度も思った。

けど、いつか、いつか、本当の笑顔で健に笑うから。

それが、5年後、10年後だとしても…。

必ず…本当の笑顔で…。

第十一章 過去

あれから一週間後。

裕の誘いもあって、溜まりば来た。

「りかこー携帯鳴ってるで!!」

見ると非通知だ。

誰だろうと思いつながら、電話に出る。

「もしもし」

「あたし玲。健の元カノだけど…健の彼女のりかちゃんだよね？」

「はい」

何で、利佳子の名前を知ってるの??

それに、何で、利佳子の携帯番号まで、知ってるの??

「健のもので、渡したいものがあるから…今から会えない??」

「はい。大丈夫ですけど…」

「じゃあ、18時に新宿駅の西口で」

「分かりました」

渡したいもの??

何だろう??

「誰からだった??」

「何か、健の元カノの玲って言う人から…知ってる??」

「嘘だろ!?!」

「まぢかよ!?!」

みんなの顔が変わった。

「りかこに渡したいものがあるんだって!?!」

「行くな!?!」

裕が怒鳴った。

「えっ!! どうしたの??」

「怒鳴ったりしてゴメンな」

首を横に振った。

裕が利佳子に怒鳴った理由はこうだった。

昔、玲のお腹の中に健との子供が居て、

でも、健は産む事に賛成はしなくて…。

そんな時に、文化祭で利佳子と健が出会って。

玲と健は前から、上手くいってなかったみたいで、

健から玲に別れを告げた。

玲は、健に子供を産む事を反対された事も、別れた事も全部…。

利佳子のせいだと思っている。

あいつは利佳子の事を恨んでいる。

行ったら、また、傷つけられる。

だから、裕は利佳子の事を心配してくれて「行くな」と言ってくれた。

裕の優しいは、とっても嬉しいかった。

でもね、ちゃんと会って言わなきゃ、

だって、利佳子には、「赤ちゃん産もう」って言ってくれた。

こんなことがあっても、「別れよう」何て、言わなかった。

だから、健が産むことを反対したのも、

健から別れようと言ったのも、他の理由があるはず。

玲は誤解している。

本当は、ものすごく怖いよ。

利佳子の事恨んでるわけだし、何されるか分からないし…。

でも、行かなきゃいけないような気がしたから…。

「大丈夫！！渡したいものを貰って、すぐ戻ってくるから…。」

「じゃあ、俺らも着いて行くわ！！」

海斗だ。

「でも…。」

「お前の事は、俺らが守るし、俺が守るって言っただろ？？」

そう言ってくれたのは裕。

みんなありがとう。

車に乗り、待ち合わせ場所の新宿へと向かう。

新宿駅に着いた。

「送ってくれてありがとう。行ってくるね」

「本当に、1人で大丈夫か??」

「うん」

「ここで待ってるからな!!」

「行ってくるね」

待ち合わせ場所へと向かう。

健の元カノって、どんな人だろう??

待ち合わせ場所には、まだ、それらしい人は居なかった。

「利佳子さんですか??」

声をかけてきたのは、スーツを来て、サングラスをかけ、

完全に顔が分からない、2人の男性だった。

「そうですけど…」

2人の男は顔を見合わせ頷いた。

その瞬間、タオルで口を押さえられ、

近くに止まっていた車のドアが開き、その中に強引に運びこまれた。

車が動きだす。

抵抗もしたが、身動きが取れる状態ではない。

目もガムテープで覆われていて、どこにいるかも分からない。

これは、全部：玲が指示しているということぐらい、すぐに分かった。

車が止まった。

ドアが開いた。

「降りろ」誰かが、利佳子の背中を押す。

言われるがまま、車から：降りた。

ここがどこだか、分からない。

ガラガラガラ。

何か、倉庫みたいのを開ける音が聞こえた。

一歩づつ歩き入る。

その場にしゃがみこんだ。

目と口を隠していた、ガムテープが外された。

しかし、手と足を縛っている、紐はとられることはなかった。

利佳子の目の前に、女の人が立っている。

上から、利佳子の事を睨みつけている。

もしかして、玲…。

電話をかけて来た人とは、まるでべつにのようだった。

怖い…。

でも、誤解はちゃんと解く。

その為に、怖い思いをして、ここまで来た。

「人殺し！！健を…健を…。返して」

一瞬理解出来なかった。

「人の恋愛をぶち壊して、健を奪って、

平気で外に出て、ニコニコしてんじゃねよー！！！」

圧倒されて、何も言えない。

「やっちゃいな！！！」

玲はどっかに行ってその代わりに、

3・4人の男の人たちが利佳子の方に来る。

「何すんのよ!!」

1人の男が利佳子の服のボタンを外す。

「やめて!!」

ガラガラガラ。

誰かが入って来た。

最初は、夕日の光で、誰だか分からなかった。

でも、すぐ分かったよ。

裕や海斗達が後を追っかけて来てくれたんだ…って。

「お前ら、それ以上手出すんじゃない!!」

「何で、お前らがここに居んだよ」

玲が邪魔されたかのような言い方で言った。

「ふざけんじゃねよ!!」

海斗が玲の胸ぐらを掴んだ。

「もう二度とあいつの前に現れんじゃない!!」

あんなに、怖い海斗を始めて見たような気がする。

「大丈夫か?? 遅くなってゴメンな」

裕だ。

「ありがとう」

手と足を縛っていた紐を取ってくれた。

ずっと、縛り付けられていたので、紐の跡がくつきりついている。

「怪我は??」

「大丈夫!!」

「頑張ったな!! 偉い偉い!!」

裕は利佳子の頭を2回ポンポンと撫でた。

「立てるか??」

「うん」

裕の手に掴まって立った。

反対側では、海斗の怒鳴り声が聞こえる。

「謝れや!!」

海斗が玲の髪を掴み、利佳子の方に来る。

「やだ…怖い。」

裕が利佳子を、ぎゅっと抱きしめた。

どンドン、利佳子の方へ玲が近づいてくる。

体が自然に震える。

裕はもっと強く抱きしめた。

海斗に髪を掴まれた玲が利佳子の目の前に来た。

「早く謝れや!!」

「ゴメン!!」

「聞こえねえよ!!」

「ゴメン…なさい」

「もう…もう…良いから…。こんな事しても、健は喜ばないよ」

玲を残して、海斗達が乗って来た車に戻った。

車に揺られながら、考えた。

もし、ちゃんと健の事を受け止めて上げられていたら、

ちゃんと、理解して上げられていたら…。

玲は、きつと…まだ、健の事が好き。

たくさん苦しんで、悩んで、泣いて、玲だって辛いよね。

利佳子だけじゃないんだね。

そんな事を思っていると、涙が溢れた。

第十二章 繰り返し

2ヶ月後

あれから、玲は利佳子の事や健の事を、理解してくれて…。

今は、新しい恋をしているらしい。

それに比べて、利佳子は、恋をするなんて考えてもいなかった。

健以外の他の男の人を好きになることも…。

冷たい風が肌にあたる。

もうすぐ、冬だ。

ん～よく寝た。

今日は日曜日！！

何もないのに、朝早くに目が覚めた。

今、何時だろう???

携帯を見ると、裕から…たくさんの着信履歴。

掛かってきたのは、昨日の深夜。

昨日は早く寝たから、全く気づかなかった。

今の時間は、朝の5時。

裕は起きてるかなあ―??

「もしもし」

「朝早くゴメンね←←昨日電話気づかなかった。何か、あったの?」

「今から…たまり場来れるか??」

「えっ!! うん。大丈夫だけど…」

「じゃあ、待ってるな」

裕の声が、いつもと違う。

とっても疲れてるみたい、よほどのことがあったのかな??

何があったんだろう??

ピンポーン

「ゴメンな。呼び出して…」

「おじゃまします」

部屋の中は、いつものみんなのテンションが嘘のように、静まり返

っていた。

「とりあえず、座って」

「うん」

「あのな、今から言うことは、もしかしたら…

お前に言うべきではないのかもしれないし、

言ったらまた、お前を傷つけることになるかもしれない。

それでも、言っても良いか?？」

少し悩んだ。

だって…もう、傷つきたくないもん、でも、やっぱり知りたい。

「教えて…」

「昨日の夜、海斗と隆がライブハウスに行ったんだ…

そこに、警察が来て海斗は逃げたんだけど、

未成年で隆が捕まった。そこまでなら、まだ、良かったんだけど…」

「あいつ、そのライブハウスで、薬を密売者から買っていたんだ」

「それで、お願いがあるんだ…

俺らは1回葉に手出してゐるから、面会に行くことはできないんだ。

代わりにあいつに、会いに行ってもらえないか??」

「うん。分かった」

こういう時、あなたなら、何と答えますか??

いきなり、聞かされた目の前の事に対して、あたたなら何と答えますか??

本当は、「行かない」と言うのが正しいのかもしれない。

すぐに答えを出したわけじゃない考えたよ。

でも、利佳子が辛かった時、助けてくれたのは、裕達そして隆だった。

だから、素直にみんなの助けになりたい。

そう思ったの。

「ありがとうな」

「うん」

「じゃあ、行くか??」

「うん」

「警察の前まで、一緒に行くから」

「うん」

警察署の前に着いた。

「じゃあ、行くね」

「ちょっと待って!!」

海斗が止めた。

「これ!! あいつに持っていてあげてくれないか??」

海斗が差し出したのは、タバコ1本とライターだった。

「分かった」

「じゃあね」

「待ってるから!!」

「うん」

本当は、みんな隆のことが心配で、会いに行きたいんだと思う。

だから、みんなの分まで…隆のこと励ましてあげよう!!

受付に着いた。

「あの、神崎 隆に面会したいんですけど…」

いろいろ、受付とかをして、隆の居る部屋に行く。

「着いた…」

ノックして部屋を開ける。

中にいた隆はまるで、別人のようだった。

隆が葉で捕まったという事を、改めて突きつけられたような気がした。

「隆?？」

「利佳子か?？」

「うん。大丈夫?？」

「あっ!! コレね…海斗が隆に渡してって預かってきたの。」

隆は利佳子の手から、タバコとライターを奪いとりタバコに火をつけた。

怖い。

どうしよう。

その瞬間、利佳子の腕を掴んだ。

「何！？何すんの！？」

口に加えていた、タバコが利佳子の腕に近づいてくる。

「やだ！！やめてよ！！」

タバコの火が利佳子の腕に焼き付いた。

熱いとも、何も感じない。

こんなの隆じゃない！！

利佳子を助けてくれた、優しい隆の姿はどこにもない。

部屋を飛び出した。

跡が見えないように手を隠しながら、裕達の所に戻る。

「ただいま」

頑張って明るくする。

絶対に今、起こったことは言わない。

裕達を心配させたくない。

「隆どうだった??」

「元気してた??」

「うん!! 元気だったよ!!」

「そっかー良かった!!」

それから、また、たまり場に戻った。

「りかこ…ちょっと外行かないか?」

「うん。良いよ」

裕と外に出る。

近くの公園のベンチに座った。

「どうしたの?」

「前に俺がりかこに、俺には絶対に嘘つかないで

悩んでる事があったら、何でも話せ…。

って言ったの覚えてる?」

「うん。覚えてるよ」

「今、俺らに嘘ついてることないか?」

裕は、すごいね。

何でもお見通しだよ。

…ありがとう。

「ゴメン。正直に話すね」

「ゆっくりで良いからな」

「隆ね…元氣何かじゃなかった。」

変わっちゃってた。隆じゃなかった。

隆に海斗から預かってたタバコを渡したの…」

もう、この先言いたくないし、跡を見られたくない。

「もしかして…。右手貸して」

さっきから、洋服で隠していて、跡を付けられた方が右手だった。

裕が右手の洋服を捲り上げる。

「やっぱりな…。何で、言わなかった、何で、黙ってた。」

また、一人で悩んで…ゴメンな」

「だって、言ったら…裕達行けないのに、

心配かけちゃうし…あたしはいくら、傷ついても大丈夫だから…」

裕がりかこの頭を自分の肩の上に引き寄せてた。

「強がんなよ…りかこまだ、中学生だろ、俺の前では泣いて良いから」

せっかく、我慢してたのに…裕の馬鹿。

裕の膝に涙が落ちる。

「怖かった…」

「ゴメンな」

裕が悪いんじゃないよ。

裕は跡がまだ、生々しく残っている、傷跡の所にキスをしてくれた。

利佳子はずっと、ずっと、裕の腕の中で泣いた。

もうすぐ、夕日が沈む。

3日後

利佳子はたまり場に来た。

隆の事があってから、みんな…あんまり寝てないみたい。

健…。

りかこに出来ることあるのかなあ??

「海斗…携帯鳴ってるよ!!」

「はい」

海斗に携帯を渡す。

「もしもし」

何か、深刻そうな顔で話している。

誰からなんだろう???

海斗が電話を切り、その場にしゃがみ込んだ。

「誰からだったんだ??」

裕也が聞く。

「…病院」

「隆に何か、あったのか??」

「屋上から、係員が目離れたすきに飛び降りて…死ん…だ。」

みんなが凍りついた。

「とにかく、警察に今から、行って来るから…」

「俺らも…行く」

「お前らはここで待ってろ!!」

ドアを閉め、車に乗り海斗は行ってしまった。

りかこだって、みんな…隆が心配だし、飛び降りた何て、信じられない。

でも、きっと…一番悲しいのは、一番近くで見ていた。

海斗だよ。

海斗は、事情があって隆の親替わりをしていた。

隆の父親は隆が小さい時から居なくて、

ずっと、母親が育っててきたんだけど、隆が小学5年生の時に癌で亡くなった。

それで、小学校の親友である、2コ上の海斗と一緒に暮らしてきた。

だから、誰よりも…信じたくないと思っていると思う。

あの時の利佳子のように…。

この日をもって隆は還らぬ人となった。

最終章 花

この一年…。

本当にいろんなことがありました。

健に出会い、

恋をし、

楽しい時も

苦しい時も

悲しい時も

いつも隣には、あなたが居ました。

あなたが私の初恋でした。

中学生で恋をしました。

第一印象は無愛想。

恋をするなんて思っていなかった。

むしろ、嫌いだった。

なのに、いつの間にか好きになっていた自分がいた。

気づいたら、いつも隣にいた。

隣にいるのが当たり前になっていた。

傍に居なかったら、とっても悲しいくて、

一緒に居ると、とっても幸せな気持ちになる。

これが、「好き」って気持ち何だと思った。

健が居ればと思う時がある、健にものすごく会いたい時がある、

その気持ちをごまかして、笑って頑張ってる…

けどね、本当は辛いよ。

とっても、辛いよ。

でも、きっと利佳子が泣いていたら、健…心配すると思う。

だから、前向き事にしたの。

いつまでも、後ろ向いていても何も、始まらないって、そう思った。

いろんな事あったけど、あなたと出会った事に後悔はしていない。

今でも、私はあなたに恋をしている。

―桐山家之墓。

今日は、健に会いに来た。

周りにはたくさんの花、買って来た：

お花と、もう一度、一緒に行こうと約束した、

湘南まで切符をお供えした。

ずっと、ずっと、会いに来なくてゴメンね。

来る勇気なくてゴメンね。

健が居ない生活になれるのが怖かった。

でもね、ちゃんと受け止めるから、

来年も再来年も、これから先、何があっても必ず来るから。

その帰り、一つだけ一生懸命咲いている花を見つけた。

周りには、何もないのに、ぽつんと、一つだけ…。

りかこみたいたいだね。

一人ぼっちになっても頑張って、一生懸命生きようね。

これから先、どんな事があっても…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2631d/>

花 ～大切な人～

2011年1月6日15時06分発行